此歌奉る、

あし引の、み山にすらも、このとりは、谷にやはなく、いかなれば、玄げき林の、おほかるを、たかき梢も、あまたあれど、羽打はぶき、とびすぎて、春夏冬の、時もあるを、君が秋しも、もみぢばの、からくれなゐの、ふりいでゝ、なくねさだかに、きかせそめつる、

山にすら稀に聞ゆる鳥なれど里にも君が時よりぞなく

其ひとも君はつげしもせじ物をいかでか鳥のかねて玄りけん

とのゝ御返し

法を思ふ心しふかく成ぬれば里にも鳥のみゆるなるらん

〔本朝無題詩九山寺〕暮春於醍醐寺即事　中原廣俊

艶陽三月欲闌程、一訪巖扉出洛城、春寺門深春草滿、暮山梯遠碧雲横、櫻桃李色花空盡、佛法僧音鳥獨鳴、此山有佛法僧故云　塵境隔蹤人事少、松風澗水響彌清、

〔新撰六帖六〕とり

松のおのみね玄づかなるあけぼのにあふぎて聞ば佛法そうなく　慈鎮和尚

〔夫木和歌抄二十七佛法僧〕

わが國はみのりの道のひろければ鳥もとなふる佛法僧哉　家隆卿

とりのねも三の御のりをきかす也み山の庵の明がたの夢　寂蓮法師

十題百首

うき事をきかぬみ山の鳥だにもなくねにたつる三の御法を

〔辨内侍日記〕二月五日、○建長二年、中略、佛法僧となくとり、太政大臣殿○藤原實氏よりまいりたるを、常の御